

連載によせて

小川 浩一*

映像と音声を同時に放送する新しいジャーナリズム組織としてテレビジョン放送が昭和28年、1953年に日本に出現してからのマス・メディアの組織と内容のいずれにおいても他面にわたる変化を遂げてきた。他方では、テレビの登場以後、受け手としての市民も、その生活全般にわたってテレビジョン放送から強い影響を受け、意識、行動の両面から変容を遂げてきた。その状況については、枚挙に暇がないほどの研究成果が残されているし、今後も多様な展開が期待されている。しかしながら、その多くはテレビジョン放送を一般化して論じたものか、全国を対象としたNHKについてのものか、ないしは民放キー局について考察されたものであった。さらに、多くは受け手としての視聴者の考察が中心であった。むしろこれらはいずれも重要な研究すべき対象であるが、他方では送り手としての放送局、就中、ニュース報道という放送ジャーナリズムの現場で活動する人の生の声には眼が向けられることが少なかった。日本の新聞の歴史の中で、記者の活動とその結果としての報道内容、記事については多くの成果が残されている一方で、テレビジョン放送については時間経過の短さにもかかわらず当事者たちの活動について我々の前には示されてこなかった。とりわけ、地域社会と直接向き合い、そこでジャーナリズム活動を行う地方民間放送局のジャーナリストたちの活動の記録は皆無に等しい。

本研究所では2013年度に、民間放送が開始されて60年となるこの年を期して、地域の各民間放送局が各々の地域社会といかに関わってきたかの証言記録を残すべきであると考え「地域と民放」として企画を立てた。昨年は当事者の方々の生きた証言をインタビューと執筆によって北海道から沖縄まで6社の記録を掲載できた。幸いこの記録は好評を得てより多くの記録を録取すべきであるとの激励を賜った。とはいえ、60年という時間の経過は決して短いものではない。放送局開設時に活躍された方々の中には既に鬼籍に入られた方々も多数となってしまった。とはいえ、幸い、今この時点であれば、開設時に直接活動された方やその方々から直接薫陶を受けた方々のお話を伺う機会がまだ残されている。そこで、これまでの60年間にジャーナリズムとして、送り手として地域の民間放送局は何を目指し、如何なる活動を行ってきたのかの一端は前述したように前号のインタビューでも示し得たが、その結果に対する激励に励まされ、この企画を発展させ、1950年代の開設後半世紀以上にわたって番組を放送してきた、より多くの地方民間放送局の当事者の方々の生の声でこれまでの歩みを残すべきであると考え、前号で執筆をいただいた局も含めてより広範な局の方々にインタビューをお願いしその生の声を記録することとした。もとより一私立大学の付設研究所の活動として大規模な事業とするのは困難なことであり、我々の今回の試みが微細な活動であることはもとより承知しているが、いわゆる「アーカイブ」、とりわけ音声や映像のそれが顧みら

*おがわ こういち 東海大学名誉教授

なお、執筆当時は、日本大学法学部新聞学科教授であったが、2014年12月をもって定年退職をした。

れてこなかったこの国に、事実が消滅する前に記録を残しておき、後世の利用、評価に資するという行為、活動の貴重さを認識させる上で一石を投じられれば幸いである。なお、本号は東日本の5局を対象としたが、次年度は西日本の各局を対象とする予定である。さらに、この企画全体をまとめて出版する予定であることを付言しておく。

※ 筆者は、2014年12月をもって大学を定年退職したが、年度初頭より第8号の編集を担当していたので本文章を執筆した。